の人が居つたものであることは疑無いし、更にその多くが此の國の人であつたらうと考へるのが適當の解釋と思ふ。摩尼教は第三世紀末に波斯で禁斷せられてからは、サマルカンド卽ち康國、シャシュ卽ち今のタシュケンドなどを東方に於る根據地とすることに成つたもので、其の後第八世紀にアラビヤ人が侵入して、此の地方を占領するに至つても、容易に其の信仰を奪ふことは出來なかつたものである。[3] それでサマルカンド地方の人が其の信奉せる摩尼教を東方に宣傳したものであらうといふことは、容易に想像せられるが、其の有樣の如何を記したものはない。支那には屢〻引用せられる如く佛祖統記（卷三十九）に武后の延載元年（694）「波斯國人拂多誕（西海大秦國人）持二宗經僞教來朝」とあるのが、此の教の傳來の初と見られて居る（同書卷七十六にも同一の本文がある）。然るに自分の考える處によると、之に先立つこと數年にして、羅布泊の南に當る處、唐に石城鎭と稱した地には、ソグディアナの摩尼教徒の一團が植民して居つたものである。卽ちペリオ氏が敦煌の佛洞から獲た沙州圖經に據ると、其の祥瑞篇蒲昌海五色の條（羅振玉氏刊行本二十三ノ左）に

大周天授二年（691）臘月得石城鎭將康拂耽延弟地舍撥狀

と記し、その狀中に、八月以來蒲昌海（卽ち羅布泊）の水清明徹底、五色の祥瑞を表せる旨を述べてあると記されて居る。これについてペリオ氏が石城鎭の位置、康拂耽延の康國人なることなどを論述した處に疑は無いが、[4] 自分は此の拂耽延なる名は實は佛祖統記に見ゆる拂多誕と同一語で、ゴーチオ（Gauthiot）氏が摩尼教僧の稱號の一つで、fur^{a}-$\check{s}$tadān —宗義を知る人—なるソグド語と解くもの〻音譯であると考る。「耽」（tan *tam）は唐代に外國音を寫す場合に「多」（to. *ta）と相通じて用ゐられて居る。卽ち唐書薛延陀傳に夷男の子拔酌の可汗としての徽號を、頡利俱利失薛沙多彌と記してあるのを、冊府元龜（卷九六四）封冊篇には沙耽彌葉護拔酌と書いてある。沙多彌も沙耽彌も共